
Corpse B ride.

神薙和刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o r p s e B r i d e .

【Nコード】

N 9 8 0 7 D

【作者名】

神薙和刃

【あらすじ】

死が二人を分かつことの無い、狂気と愛の物語―。

one: 徒花の corsage

「なあ、人にぶつかって謝りも無しか？」

薄暗い路地裏から響いた、よくある不良が相手に絡むときの台詞。今回もそれをいったのは、長い髪を整髪料で後ろに流した男。

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべて見るのは十代の少女。
セミロングの髪にカチューシャ、服は黒色のフリルのついたゴシック調のドレス。

それはさながら、花嫁姿。

蠟人形のように虚空を見つめたまま表情を変えない少女に業を煮やした男は手を振り上げる。
が――

後ろから伸ばされた別の手がそれを握る。

「！」

男が振り返ると、そこには黒尽くめの少年がいた。

伸ばしっぱなしの黒髪に、襟を立てた黒のレザーコート。
黒いレザーグローブ。

体には鎖が巻き付けられている。

だが顔は白い。

漂白されたかのように白く、髪の間から覗く眼は瞳孔が開ききっている。

その不気味さに言葉を失う不良男。

少女はその少女の背後に回り、寄り添う。

「彼女に関わるナ」

ぐぐぐと力を込め、バキリと不良男の手を握りおる少年。

叫び声を上げられる前に男の鳩尾に拳を叩き込み、気絶させる。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう…黒須」

黒須と呼ばれた少年は少女の頭を無表情で、しかし優しく撫でる。

今まで人形のようにだった少女も、わずかに頬を緩ませ少年にすりよる。

しかし顔をしかめ離れる。

「どうした？」

「匂い、目立ってきた」

少女は香水を取り出し、黒須へと振り掛ける。

二回、三回、四回……

空の香水瓶が路地裏に落ちる。

きつい香水の香りがあたりに立ち込める。

すまないと黒須が短く詫び、微笑みながら首を横に振る。

黒電話の音が鳴る。

黒須がポケットから携帯電話を取り出し、ディスプレイを確認すると少女に手渡す。

「はい」

『ゆきな逝那、任務だ』

「はい」

『異端者が深夜にその近辺に出没している。見つけ次第【断罪】せよ』

「はい」

『父と子と聖霊の御名に於いて』

「AMEN」

電話を切った逝那を見つめる黒須。

「仕事、力」

「うん」

短く告げた逝那を抱え、闇に消える黒須。

路地裏には腕を折られ気絶している哀れな不良しか残らなかった。

夜

街の夜を徘徊する若者。
至極普通の光景だ。

しかし行きずりの通行人を襲い、その血肉を喰らうのは普通ではない。
い。

カニバリズムを楽しむ若者たちの前に立ちはだかる黒須と逝那。

「何だ？お前ら」

女性の頭をかじりながらリーダーらしき男が尋ねる。

無言で黒須は中空に腕を振るう。

すると若者たちに銀色の軌跡が無数に走り、黒須が腕を引いた瞬間数人を除く若者たちが細切れにされる。

「なあっ！」

からから脱出したリーダー達に拳銃を構える。
コンペンセイターを取り付けたグロックだ。

パパパパと乾いた音が一繋ぎに響き、過たず少年達の頭を撃ち抜く。

しかしリーダー格は尚も立ち上がり、貪婪な目つきで二人を睨む。

「異端者みたいね」

「ああ、不死者^{アンデッド}ダ」

仲間の死肉を喰らい、傷を癒やすリーダー格を見つめ、そう言う二人。

「不死者あ？」

首を傾げるリーダー格に逝那は胸にさげたロザリオを掲げ、淡々と話す。

「呼んで字の如く、死なずの君、死して尚さ迷う未練の塊、醜惡な身腐り、そして…私の敵」

そう言っておきながら、

「いいえ」と自らの言葉を否定し、黒須に寄り添う逝那。

「私と、我が夫『黒須』の敵」

静かにそう言い放てば、黒須がリーダー格へ突進する。

リーダー格は叫びながら手を突き出し、黒須の腹を貫く。

ダバダバと腹部から濁流の様な血が流れ、地面をどす黒く染めてゆく。

しかし黒須は表情一つ変えず、リーダー格の肩を掴む。

「な、なんだお前！人間じゃないのか！？」

「……」

黙る黒須の側へ移動し、その白色の頬に口付けする逝那。

「私の黒須もまた不死者。不死者を狩る不死者」

逝那は静かにリーダー格のこめかみにグロックの銃口を押し当てる。

「灰は灰に、塵は塵に」

「大丈夫？」

「ああ、問題ない」

不死者の屍の前で佇む逝那と黒須。

逝那は裁縫針で黒須の傷を縫い合わせている。

痛みは無いらしく、黒須はただ無表情にその作業を淡々と見つめている。

「終わったよ」

「ああ、ありがとう」

傷を縫い合わせた逝那は黒須にそう言うと、少し身をかがめるように催促する。

黒須が身をかがめると同時に、逝那は自らの唇と黒須の唇を重ね合わせる。

ただ触れるだけの口付けを終え、逝那はさびすを向く。

「行こうか」

「ああ」

21世紀初頭。

巷に溢れた存在『不死者』

死したが故に死の恐怖を捨て去り、肉体の限界を超えたそれは人間を侵し始めた。

それを危惧した法王庁ヴァチカンは一つの対異端用特務機関を設立する。

刻印教会である。

僅か構成員数名に満たないその機関は世界各地に出没し、不死者達を全滅していく。

だがそのエージェントこそ不死者であり、そのパートナーが不死者の嫁であることは一握りしか知らない。

「はい、逝那です」

『次の任務だ。至急ロンドンへ』

「ロンドン？」

『英国国教会本部が不死者の襲撃を受けたらしい。法王庁は英国国教会を援護し、不死者掃討に協力することにした』

「わかりました。至急ロンドンに向かいます」

『頼む。父と子と聖霊の御名に於いて』

「amen」

「仕事だナ」

「ロンドンだって、行こう」

「ああ。わかつタ」

そうしてまた交わされる口付け。

偽りと殺戮のweddingを経て、私達は本当の夫婦になった。

病めるときも
苦しきときも
痛むときも
死するときも

違うことなく、一秒一コマ狂うことなく一緒。

死は二人を分かつたずにより二人を結び付ける。

【ツヅク……】
人物紹介へ↓

【人物紹介】

・黒須クロス

【名／人物】

【享年19歳。175cm / 69kg】

・対異端用特務機関『刻印教会』エージェントにして『不死者』
逝那の夫であり、彼女の良きパートナー。
武器はワイヤー！。

・ 逝那 ユキナ

【名／人物】

【17歳。158／48】

・ 対異端用特務機関『刻印教会』エージェント。

黒須の妻であり、黒須をもっとも愛するパートナー。

武器はコンペンセイター付きグロック。

・ リーダー格 リーダーかく

【名／人物】

【享年18歳。180／70】

・ チーマー。バイク事故で死亡後、搬送先病院にて不死者として覚
醒。

武器は素手。

・ 不死者 アンデッド 【名／体質】

・ 未練を持つ人間が再び生き返る現象。

体を保つために他の人間を補食する必要がある。

主に早死にした十代から二十代が不死者になりやすい。

人間が無意識にかけてある肉体のセーフティを外せるため、人間
より強い。

そのかわり人間時にはなかった自壊の危険性が出てくる。

t w o : チカイノコトバ (前書き)

健やかなときも

病めるときも

悩めるときも

喜ばしきときも

たとえ死が、二人を分かつとも

永久に私達は寄り添い、一緒に居ることを

チカイマス。

t w o : チカイノコトバ

私がまだ『幸那』だったころ。

私は不義の子供。

愛人の子供だと父母に疎まれ生きてきた。

でもね、それって不公平だよね。

私だってそんな生い立ちに生まれたくて産まれたわけじゃ無いのに。

寧ろあなたが悪いんだよ、父さん。

ちゃんとした奥さんがいるのに火遊びなんかするから、私が産まれちゃったんじゃない。

だからね、父さんの首をキュツと締めた。

父さんの奥さんも寂しくならないように、父さんのコレクションの銃剣で喉の奥を掻き回してあげた。

だから警察に追われてるのは当たり前。

苦しかったから云々は言うけど、あの人たちみたく他人のせいにする

る気はない。

そして逃げている内に、私は運命の出会いを果たす。

傍らに血を流しながら倒れる女の人。

そのそばで満たされた笑みを浮かべる、血がべったりついた彼を――。

黒須もまた、私と同じで不義の子だった。
ただ私と違い、すぐに捨てられたらしい。

だから復讐に父母を殺し、財産を奪い逃げて、逃げて、逃げています。

親近感を覚えた私は、黒須についてゆく。
黒須は、最初は私を拒んでいたけど、私の生い立ちを話すとすんなりと側にいることを許してくれた。

その時

私は15で、彼は17

奇妙なカップルの誕生だ。

それから一年間、私達は病める時も、悩める時も、健やかな時も一緒にいた。

彼が私を必要として
私が彼を必要として

素晴らしい毎日だった。

「これは？」

私の薬指にはめられるリング。

飾りも何も無い、無骨な鉄の輪を通し、黒須は私の肩を抱く。

「…俺なりの、結婚指輪だ」

「え……」

正直言つて意外だ。

黒須はいつも仏頂面で、何を考えているか分からないから。

でも、どこかほにかみながらコレを渡す黒須が可愛くて、私はプツと吹き出してしまった。

それでうるたえる黒須も可愛い。

私は、それを承諾した。

黒須の指輪に唇をつけ、黒須の、生涯のパートナーを受け入れた。

健やかな時も

病める時も

私はいつまでも黒須と共にある。

その筈が

「幸那！」

黒須の叫びとともに胸が熱くなる。

陶酔とかではない。

焼けたような熱さだ。

胸から突き出るナイフの刃。

赤く染まったそれには、私の肉の一边がこびりついている。

地面が揺れる。

血を吐き出しながら倒れる私を見下しているのは、見知らぬ奴。

そいつは私の腹を引き裂き、臓物を引き出し美味そうに咀嚼する。

小腸が相手にチュルチュルと吸われる度に、私の体は快感と苦痛に支配される。

もし黒須にやられているなら、私は何度もだらしなく絶頂に達しているんだろうか。

黒須の泣き叫ぶ声が聞こえて、私は闇に意識を投げ入れた。

泣き叫ぶ黒須と
臓物を喰われる感触

『死が二人を分かつまで』

そんなチカイノコトバを瞼の裏に残しながら

「……あ」

小さい息と共に目覚めた私は、体を見る。

私はショーツ以外見につけておらず、胸にはYの字に縫い傷がつけられている。

辺りを見回すと、凹凸の目立たない、さながら無菌室のような白い部屋の真ん中に存在している台に、私は寝かされていたことが分かる。

『気がついたかね』

不意に聞こえた機械的な音声に、私は身構えた。

『落ち着きなさい。私は敵ではない。…不死者に襲われた君達を保護した』

「あん…でつど？」

『そう、未練を残した人間が死んだ時、また蘇る。それが不死者』

信じられない話だが、私は信じた。

信じなければならぬような気がしたから。

『不死者は腐ってゆく体を保つために人を襲う。人の器官が必要なのだ』

私は胸の傷を触る。

だからあの時、私は不死者とかに内臓を――

「じゃあ、私の内臓は……」

『運良くあの場に居合わせたドナーが居てね、都合良く君との相性もばっちりだから使わせてもらった』

「……誰？」

『彼だ』

後ろを見たまえ、という声に従い、私は振り向く。
そこには――

「黒須！」

黒尽くめの格好で立ち尽くす彼がいた。

『彼から摘出したのは、大腸、小腸、腎臓、……そして心臓だ』

心臓？

でも黒須はここにいる。
幽霊では無いのだから、おかしい。

もしかして

『彼は、不死者になった。せめて我々に従うように施術させてもら
ったが……』

嫌だった

私の大切な人が、私のために死んで、死に損なっている。

私は駆け寄り、彼の胸を思い切り叩いた。

「なんで…こんな…」

「すまない。だが、幸那には生きて欲しかった」

そっと彼が私を包む。

血の臭いと、彼の香りが私を犯す。

行き場のない哀しみに陵辱され、彼が死んでも尚側に居てくれる嬉しさに身を委ね、私は黒須に包まれながら涙を流し続けた。

私たちを保護した団体は『刻印教会』だと名乗った。

今世紀、突如増え始めた不死者を抹殺するために法王庁が用意した、
一騎当千の聖堂騎士^{クルセイダー}数人で組織された対異端用特務機関。

私達は、それにスカウトされた…と言うより、事態の漏洩を良しと

しない彼らに加入させられた。

だがそれは渡りに船だ。

黒須を不死者にさせてしまった身腐り共を、皆殺しにするほか償わせる方法はない。

―私が、黒須を不死者にさせてしまった償いもまた、それしかない。

黒須の一部と一緒にになった私は、ますます彼に惹かれた。

男と女は元々一つだといったらしいが、ならば私の半身は間違いなく黒須だろう。

「健やかなときも」

「病めるときも」

「悩めるときも」

「喜ばしきときも」

死が二人を分かつことは無く、永遠に一緒――。

それが私から黒須への

チカイノコトバ。

【ツヅク……】

t h r e e : さふあれかし

A m e n

【読：あーめん 若しくは えいめん】

意味

そうあれかし、そうでありますように

バリバリと食う黒須。

何を食べているのかと言えば、マツチ箱である。

マツチには防腐作用がある

「りん」が含まれており、『刻印教会』支給の防腐剤と併用している。

「あ、口に木片ついてる」

「ン？ああ、すまない」

「ふふ、全くそそっかしいんだから」

笑顔で黒須の口の端についた木片を除く逝那。

かなり異様だが、傍目から見ればいちゃいちゃしている事に変わりはない。

まあ、見学者は居ないのだが。

濃霧に包まれた街。
英国首都ロンドン。

黒須と逝那は『刻印教会』から英国国教会援護の要請を受けこの地に降り立っている。

今は英国政府による非常時戒厳令により通行人は全くいない。

どうやら欧州で一番『不死者』が発生しているらしく、来ていきなり襲撃も受けた。

「新婚旅行のつもりで来たけど、ムード無いよね」
「確かにナ」

冗談を飛ばしつつ、二人は街中を散策する。

目的地は英国国教会支部である。

支部には孤児や難民、戒厳令で帰宅が不可能になった市民が保護されており、まずは其方を最優先せよと命令されている。

直に大きな教会が見える。

石造りの壁にはうつすらと苔が生えており、教会が如何に長い年月を歩んで来たかを如実に物語っている。

教会の周辺には、聖句と清めた水とで描かれた結界が施されている。恐らくは不死者用だろう。

「まいったナ。このままでは俺も入れないゾ」

「大丈夫。これがあるから」

逝那は胸元をまさぐり、ロザリオを取り出しそれを黒須の手首に巻く。

じゅうつと肉を焼く音が聞こえ、黒須が無表情ながら苦悶の声を上げる。

逝那は黒須を引っ張り、結界の中へ引き連れた。

「『刻印教会』のエージェントは常に不死者のパートナーが居る。

だから結界突破用の免罪符があるんじゃない」

「そう力…そうだったナ」

「もっ…。そろそろ脳みそ、換え時なんじゃない？」

辛辣な逝那の台詞にぬうと釈然としないような声を出す黒須。
逝那はどこ吹く風といった感じでロザリオをしまい、教会内へと入る。

礫にされたキリストの真下には、ぼろ切れをまとった老人が震え、孤児たちが外の状況も解らず騒ぎ立てている。
対応に追われるシスターたちを眺めていた逝那に、一人のシスターが声をかける。

「あ、貴女が『刻印教会』の？」

黙って頷く逝那に怯みつつ、シスターは自己紹介を始めた。

「はじめまして、M s・ユキナとM r・クロス。私はシスターのインテグラです」

「はじめまして。…一つ訂正良いかしら」

「は、はい、何でしょうか」

「M s・じゃなくて、M r s・ね」

夫はあっち。と黒須に親指を差す逝那に

「はあ…」と呆然としながら返事を返すインテグラ。

「被害は？」

「まだ、大丈夫です。結界のお陰で皆さん無事に過ごしています」

ただ…とため息をつくインテグラに怪訝そうな表情を向ける逝那。

「何か問題ガ？」

「はい、噂で『結界の聞かない不死者』が出てきたと……」

穢れを嫌う聖句の結界を突破出来るのは『刻印教会』エージェントの『不死者』のみだ。

懸念を孕んだ声で

「逝那」と呼んだ黒須に無言で頷く逝那。

「でも大丈夫ですわ。ここは神の家。何かあれば神が我々を守って下さいます」

両手を握り締め、にこやかに語るインテグラに逝那は呆れたような馬鹿にしたような溜め息をつく。

「神様はアナタ達を助けないよ」

その言葉が響いた瞬間、ガシャアアンと窓を割り不死者達が教会へ侵入する。

阿鼻叫喚渦巻く教会内。

しかし黒須と逝那は動かない。
まるで何かを試すかの様に。

「いやあっ！ユキナ！なぜ誰も助けられないのですかっ！」

不死者に引き摺られながら、インテグラは動かずに直立不動している逝那にそう叫ぶ。

逝那はフツツと失笑し

「神様が助けってくれるんでしょ？」

と冷たく切り返した。

難民の老人達は必死に祈るも、事態が好転する訳も無く――。

「やあっ！」

服を破かれ、跪かされるインテグラ。

教会の中央には不死者達により全員が集め、固められている。

どうやら一人一人なぶり殺しにするさまを見せつけながら殺すらしい。

凶器を片手に近寄る不死者から後退りするインテグラ。

震えながら口ザリオを掴むも、何も起こらない。

「やあっ… たすけて、 たすけて たすけて たすけて たすけて たすけて たすけて！」

壊れたレコードの様にたすけてを繰り返すインテグラを嘲笑う不死者達。

嘲笑を終え、凶器を振り下ろさんとした刹那。

「ね？神様は助けない」

乾いた銃声が鳴り響き、インテグラを殺そうとした不死者の頭を吹き飛ばす。

こぼれた脳の肉片と血を浴びながら呆然とするインテグラ。

見れば逝那のグロックが、不死者を捉えていたのだ。

黒須もそれに続き、コートを翻し攪乱をしながら不死者数人に近づき、ワイヤーに絡めとる。

腕を引けば不死者は寸断され、バラバラの肉片がポップコーンにはじけて教会の床を汚してゆく。

逝那が左手に、もう一丁グロックを構える。

勢いよく火を吹き出したグロック達は過たず不死者の体に細かい穴を開ける。

数人を倒した所で、逝那のグロックは熱を持ち、スライドを開ききったまま沈黙した。

つまり弾切れだ。

それを見計らい、逝那へと飛びかかる不死者。煌めくナイフの刃が逝那を捉えようとした瞬間、黒い影がそれを遮る。

黒須の体がずぶりと刃を飲み込み固定する。
その影で逝那がゆっくりと、確実にリロードを行う。

「神なんて、虚像よ」

神がいたなら、私と黒須は普通に生きていた。
私は暖たかな両親を手に入れ、黒須も人並みの生活を送れた。

神がいるならば

私と黒須を引き合わせてくれた事だけ

すがってるなんて馬鹿みたい。
amen? そうあれかし?

「そんなのは只の懇願ダ。信仰の蓑を被った自己放棄ダ」
「天は自ら動くものを助けるの。神様なんてのは弱い人間がすがりを求めた末に誕生した虚像」

サイトを不死者のこめかみにあわせる逝那。

そしてチャンバー内を含めた弾丸を全てぶちかます。

頭が吹き飛んだ不死者を見下し、ナイフを引き抜く逝那。
そこについた黒須の血を愛おしく、かなり淫らに舐め回す。

刃に舌が触れたのか、逝那の舌から血が溢れ出す。

逝那の血を求めたのか

生前の未練をその流れる生き生きとした鮮血に求めたのか
黒須は逝那の舌に吸い付き、血を味わい始める。

逝那は拒まず、むしろ押し付けるように口づけを求める。

死体と血と、碎けた臓物にまみれた『神の家』で。

「私が神を信じない理由の一つは黒須。神の定めた敵、不死者なのに黒須はみんなを助けた」

不死者であると露見した黒須を怪訝そうに取りまく皆とインテグラとに高らかに宣言する逝那。

「神に全てを頼るのは馬鹿馬鹿しい。そんなのは生きていないのと同じ」

人には意志がある。
ならば意志のままに生きよ。

逝那と黒須はそれだけ言うと、支部から立ち去った。

外であわただしく展開するSAS部隊の脇を通り過ぎる二人。

黒須は逝那の手をつなぎながら道に行く。

「逝那」

「大体言いたいことはわかるけど、何？」

「法王庁ヴァチカンに行くゾ」

「…そうね」

インテグラは言っていた。

結界をもつとしない不死者がいる噂を聞いたと。

逝那は見た。

施された結界を超えて支部に侵入してきた不死者を。

黒須は覚えている。

不死者が結界を突破するには、『刻印教会』製のロザリオが必要だと。

統合すれば

『刻印教会』が裏で絡んでいると

そういうことになる。

「無駄にややこしいナ」

「なら止める？」

「いや、逝那が行くのなら俺も行く。俺は逝那の夫なのだから」

逝那はそのセリフに感激したのか、手を離し腕を組む。

陶醉した表情のまま、二人はヴァチカンへ続く道を北上する――。

【ツツク……】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9807d/>

Corpse Bride.

2010年10月9日16時44分発行